

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名： 小松原 孝文

小松原孝文氏の博士号請求論文『保田與重郎——保守知識人はかく考えき』は、昭和期を代表する評論家で、これまで若い世代に皇国史観と戦時国家主義を煽動した中心人物とされてきた保田の批評活動を、あらためてその表現と論理と文脈に即して再検証しようとしたものである。

小松原氏は、まず橋川文三の『日本浪漫派批判序説』に代表される、戦後の文学動向における保田への「憎悪」に満ちた批判から保田の批評活動を引き離す立場を継承しながら、さらにその議論を先へ進めようとした。橋川が保田の「イロニー」を「病的な憧憬と美的熱狂」として位置づけたのに対し、小松原氏は保田の「イロニー」には「破壊や死というものが微塵もないばかりか、未来への希望に満ちあふれているとさえいえる」とし、「イロニー」を、保田の批評の認識論的な枠組として位置づけなおした。

とりわけ「イロニー」を保田の批評文の非論理性の要のように位置づけてきた従来の研究に対し、小松原氏は「保田のイロニーの手法」こそが、彼の批評文の論理的な生成過程を支えているという立場から、代表的な論稿についての詳細な再検証を本論文で実践した。

第一章で、小松原氏は保田の文学理論は、文学をする主体を問うものであることを主張した。それは作家が己の「真実」をもとめて無限に破壊と建設を繰り返していくことであるが、こうした自己反省を自分の書いたものにも適用し、己の言葉も次々と問い直していくところに保田の文学の特質があったとした。こうした理論的な考察に加え、保田がロマン主義に依拠する根拠として、ロマン主義を一つの思潮ではなく、近代の作家に共通する基盤として捉えていることも明らかにした。小松原氏はまた享受者の歴史の変遷により、近代の作家は「孤独」であり、常に「超越」することが求められるという保田の可能性を見だし、そして、新しい言葉の可能性へと開かれると論じている。富士谷御杖の「言霊」の議論を取り上げるのも、自己と他者の断絶の間で、言葉が新しい意味を見出される可能性を保田が重視しているからであった。

第二章では、こうした理論に基づき、小松原氏は「日本の橋」を考察していく。第一章で確認された、自らの言葉さえ破壊し組み替えていくという保田の文学運動に留意しつつ、「羅馬びと」や「日本」の境界が、様々に構築され直していく過程を小松原氏は分析している。また、全体を関連づける「裁断橋」の戦乱による犠牲の想起を根底に置きつつ、境界変更の合間から垣間見える世界史を検討することで、区分の表象からこぼれ落ちるものが浮き彫りにされていた。そして、ここで語られる「日本の橋」や「羅馬人の橋」が、実体ではなく、区分を問い直す態度や方法であることを明らかにするとともに、それがギリシア・ローマ、あるいはキリスト教を起源として自らのアイデンティティーとする近代の西欧を批

判する「評論」であることを小松原氏は明らかにした。

第三章では、保田の文学史構想の鍵となる人物として、ヤマトタケルと後鳥羽院を小松原氏は取り上げた。「戴冠詩人の御一人者」というテキストで、ヤマトタケルは「英雄と詩人」として語られている。しかし、こうした存在は明治天皇——およびそれを引き継ぐ近代の天皇——と重ねられていき、悲劇の英雄の物語である『古事記』に保田が着目することから、これが近代の天皇を中心とする忠君愛国的なイデオロギーに倫理的に違反していることを示すと小松原氏は指摘している。さらに、遠征の途上で誤った「言挙げ」をすることで自滅することになるヤマトタケルが、アジアへ遠征を行っている同時代の日本の動きに対しても、批判的な言説になりうることを保田が明らかにしたこと小松原氏は注目する。また、後鳥羽院は、こうしたヤマトタケルの「至尊」の流れのみならず、大津皇子のような「浪人」の流れや、大伴家持の「サロン」の流れがすべて流れこむ存在として保田が位置づけたことにも小松原氏は着目した。それはまた西行や芭蕉の隠者の系譜にもつらなり、時空を超えた他者との交流へ開かれる存在であったと結論づけている。

第四章で小松原氏は、戦後のテキストとして「みやらびあはれ」と「絶対平和論」について論じている。「みやらびあはれ」では帰国後地図から消えていた沖縄をもとに、かつての沖縄訪問や従軍先で出会った沖縄の軍医との交流を重層的に想起する論として位置づけていく。日本の戦争で犠牲になりながら、戦後の日本社会から忘却されていく沖縄の姿を照らし出すとともに、本土と沖縄の関係を、忘却された「中三句」をもつ歌から問いかけるものであったと関連づけていく。「絶対平和論」で、近代の戦争に関わらない態度を保田が示しつつ、西洋近代に対する対抗するものとして「アジア」の可能性が語られたことについて、小松原氏はそれが対立や弁証法によるものではなく、近代の外に脱却することであったと結論づけている。

保田の戦後の非転向の問題について小松原氏は、「日本の橋」のようなテキストを見る限り、保田は「日本」の固有性を堅持するどころか、むしろ解体する方向へ動いていると指摘する。また、「戴冠詩人の御一人者」や「後鳥羽院」のテキストが示すのは、保田が他者と向き合うときの倫理を問題にしており、他者に対する誤った「言挙げ」が自らを滅ぼしたり、隠者として時間や空間を超えて様々な他者と邂逅したりする特徴を、日本の文学史の伝統と位置づけることを小松原氏は保田の独自性とした。また、それは同時代の言説を内側からずらし、保田が他者と向き合う倫理を提示していたからだ小松原氏は主張する。そして同時代に日本がアジアへ武力によって侵略を行っていたことをふまえるならば、そのような倫理を唱えることは、保田が日本の外の他者と何とか向き合う方法を考えていたからだと考えられるという結論が導き出されていく。

したがって、戦後の沖縄やアジアへの関心については、保田が沖縄やアジアの歴史的な悲劇を浮き彫りにしつつ、沖縄を忘却して平和憲法を礼讃したり、再軍備へと開かれたりする時代に、他者が忘却されていく日本のことを憂いていたと小松原氏はとらえていく。

保田は極めて論理的に思考しているし、国策イデオロギーを切り崩すような言葉の使い

方をしており、保田が日本のもつ言葉の伝統に強い信頼と期待を抱いていたとし、それは復古ではなく、西欧中心の「近代」を問い直すという今に資するものとして、古典や日本の言葉を参照したからだとして小松原氏の論は結ばれていく。

審査の過程においては、戦時下の若者たちを戦場にむかわせるうえで、大きな役割を担ったとこれまで位置づけられてきた『万葉集の精神』が論じられていないことが保田の全体像をとらえるうえでの不十分性として問題にされた。また保田自身の批評文に対する分析は、きわめて詳細で鋭いものになっているが、小松原氏の指摘が、なぜ同時代の文学界では超国家主義的な受容をされてしまうのかということまでとどいていないという批判もなされた。

しかし、これまできわめて固定された文学史的な枠組にあてはめられた保田與重郎の難解な批評文を精緻に分析し、「イロニー」というキー・ワードの機能を十分生かしながら、これまでの研究史とは異なった保田の在り方を提示した論文であることが確認された。

また従来の保田研究では、ほとんど無視されてきた戦後の批評文を同時代状況の中で詳細に検証し、そこに戦中と戦後において決して「転向」をしなかった保田の一貫した姿勢を証明したことも評価された。

なにより、戦後文学史はもとより、文学研究の対象としても固定されてきた保田の批評テクストについて、詳細でいきとどいた分析的読みが行われ、これまでの評価を大きく転換しえたことは、本論文が博士論文としてふさわしい質を持つことが審査員の間で確認された。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。